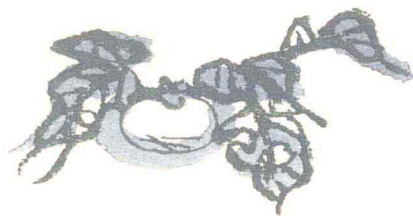


靖文社版



壽岳文章著

紙障子

昭和十七年十二月十五日印刷
昭和十七年十二月二十日發行

(三〇〇〇部)

紙 障 子

二・五〇 〆

著 作 者

壽 嶽

嶽

文 ぶん

章 しょう

發 行 者

大阪市天王寺區夕陽丘町二〇
南 方 靖 一 郎

印 刷 者

大阪市西區阿波座中通二丁目
余 部 博 章

認 承 協 文 出
ア 300468

會員番號西大第四五號

配 給 元

東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發 行 所

大阪市天王寺區夕陽丘町二〇
靖 文 社

會員番號一一四〇六八
振替大阪三五〇六五
電話天王寺四一二五一

はしき

決して筆まめな自分ではないが、それでもあれこれと新聞や雑誌の依頼に應じて書いたものがたまりました。つて、かなりの數にのぼった。もとよりその時その折の感想を録したものが多く、まとめて書冊の形とするにたへ難いのであるが、何の見どころがあつてか、靖文社の主人來つて頻りに板に上したいと言ふ。一再ならずである。熱意に動かされ、前著「書物の道」以來の舊稿を集めてはみたものの、身邊の仕事うづたかく、到底みづから取捨選擇に従ひ難い。よつて奈良松山なる木水彌一郎氏にその整理と按排とをゆだねたところ、快くひきうけられ、和紙に關するもの、工藝一般に關するもの、書物に關するもの、の三つに大別し、これに旅行記と消息とを加へ、手ごろの隨筆集とされた。木水氏に對し、深く御禮を申しあげる次第である。

とり集められた諸篇は、行文いづれも未熟なものはあるが、日本文化の諸問題に關し、私が何をどのやうに考へてゐるか、また私どもの生活はどんな基礎の上に建てられてゐるか、は汲みとつていたゞけると思ふ。その生活原理は、いかに烈しい動轉の時代にあつても、嚴として不易であることを私は固く信じてゐる。さうでなければ、すべてに極度の節約が要請される今の時代に、何を苦しんで、行きずりの人の眼には無用の閑文字としか映らぬかやうな集録を公にしよう。書題の「紙障子」は、冒頭的一篇と、總じて和紙に關する隨想が多いのにとに因んでつけた。

昭和十七年九月、簾を紙障子に替ふる頃

壽 岳 文 章

目次

障子

九

和紙

一五

手漉和紙を語る

三三

和紙禮讃

四三

紙のふるさと

四六

紙と文學

五六

枕草子に見えてゐる紙

六五

支那の紙

六八

民藝運動の將來

八五

民藝館と私

九三

繪本どんきほうて由來

九八

美しい書物について

一三〇

裝本について

一三八

和紙と装幀

一三九

活版五百年

一四一

書物供養

一四九

讀書辨道

一五五

愛・書物・親和力

一六三

唐人の寢言

一七二

かたくりの旅

一七七

四國の旅

一八四

日向の旅

一九〇

私版だより抄

一九六

向日庵消息抄

二二三

あとがき

二四六

装幀
芹澤銑介

挿 畫 目 次

- | | | |
|---|--------------------------------|----|
| 一 | 薩摩伊作の紙漉風景（芹澤銈介ゑかく） | 三 |
| 二 | 薩摩伊作の紙漉風景（芹澤銈介ゑかく） | 三 |
| 三 | 支那の製紙（「天工開物」より） | 四 |
| 四 | 繪本「どんきほうて」の一場面 | 二六 |
| 五 | 同 | 二七 |
| 六 | 搖籃期印刷の一例
（マインツのショップフ、一四七八年） | 四三 |
| 七 | 友安三冬の藏書票 | 二六 |
| 八 | かたくりの花（飯沼慾齋「草木圖説」より） | 一九 |

紙障子

障子

霜がれてせうじの蠅のかはゆさよ

一茶

學生のころ嗜讀した文曉の「花屋日記」は、まぎれもない偽書ではあるが、芭蕉の臨終はかうもあつたらうと想像される不思議な創作力があつて、いまだに感銘がうすれない。中でも忘れがたいのは、臨終の前日の元祿七年十月十一日、朝の時雨のあとをうけてからりと晴れた秋日和の、日南の障子に羣る蠅を、弟子たちが藪で器用不器用さまざまにさし取つてゐる、その有様をしばらくは興ありげに見てゐた芭蕉が、つと寢所へ入つた微妙な心理のひらめきである。この事は支考の「笈日記」にも、『その日は小春の空の立歸りてあたたかなれば、障子に蠅のあつまりいけるをにくみて、鳥もちを竹にぬりてかりありくに、上手と下手と

あるを見て、おかしがり申されしが、その後はたゞ何事もいはずなりて、臨終申されけるに、誰も誰も茫然として、終の別とは今だに思はぬ也。』とあるから、正しい事實と考へてもよからう。嘗て『面白うやがて悲しき鶉舟哉』と吟じた芭蕉が、この時どんな氣持であつたかは推察に難くない。ましてや、目前に死を覺悟してゐる大病の際である。はかない生命の、僅かに残る一ときを求めて日だまりの障子にあつまり、見る見る「死」の黒き手にさらはれてゆく蠅とわが身と。ブレイクに「蠅」と題する非常に冥想的な一篇の詩があるが、この時の芭蕉の心理を掘りさげれば、きつと共通な地層へ出るやうに、私には思へてならないのである。が、ブレイクの場合には、その挿繪が示すやうに、羽子板に似た蠅たたきが背景となり、芭蕉の場合には、限界のない——と考へてもよい——外界のあかるい光線を、閉ぢこめられた局限の室内へ間接にもたらす紙の障子がある。西洋と東洋との詩境の相違とでも言ひたいやうな漠然とした理念も、この背景の道具だから抽象されてはくるが、それは別の問題として、

しばらくは蠅を興がつたが、そのまま物言はずなつたと云ふ臨終の芭蕉の氣持を考へると、私はそのとき障子が演じてゐる大きな役割を思はずにはゐられないのである。

さう思つてみると、障子が建築様式からだんだんと追ひのけられ、ぢかに外光を導入するガラスが紙の代用となつた近代に於てさへ、障子を支點として試みられる觀照は、意識的にせよ無意識的にせよ、われわれの文學に多いのではなからうか。現に、『障子あくればあをみたしかに流れ入る外の面のひかり惜しむ如く閉む』との、五島美代子氏の近詠も見出されるし、環境は違ふけれど、歌集「立春」の中の、「洛北大原行」に收められてゐる木下利玄子の左の三首もまた、障子が感動の中心に、しかも自己否定的に位置するものと言へよう。

庵室の障子あけてみれば日はかげり又日は照るも大原の峽に

庵室の障子に午後の日あかるく山の底冷え膝に感ずる

庵室の障子あかるき午後にして茶を汲む尼の

頬の紅きこと

利玄子に見るやうな凝視がなく、対象の精確な把握がないので、私は若山牧水をあまり高く評價しないのであるが、それでも、『たてまはす紙の障子のあかるくてこころかなしきけふのひとりゐ』や、『部屋にまだ灯のあるものをみそさざい障子のそとの竹に來啼ける』などは忘れがたい。へんな言ひ方だが、どうかすると散漫になりやすい牧水の氣持を、ここでは障子がひきとめてゐて、やむを得ずかうした歌境に置いた、とさへ思はれるのである。

窓掛をもち、ブラインドを持ち、また鎧戸を持つ紅毛人は、雨から風から、また人の眼から、内部の生活を遮斷する唯一枚の紙の障子を見て、何と云ふはかなさぞと危惧し警告する。これに對し、われらの國人は、——そして小泉八雲のやうな日本愛好の歸化人は勿論、——日本の生活がいかに自然と密接な交渉をもつかを述べ、わが國では、家も自然の謙遜な一部分であることを語り、軽く障子をすべらせるだけで、室内が

直ちに外界となる非個人主義的態度を讚美する。しかし、これだけでは十分な答ではない。一見もろく弱さうなああの障子紙が、その實、どんなに強いのか、——日本的に強いのか、を會得させるのでなければ、どれほど日本に關する知識が豊富であつても、その紅毛人は一介の觀光客、日本に縁なき衆生に過ぎぬであらう。しかも私の危惧することは、かんじんの日本人自身さへ、さうした紙の強さへの本能的な感覺を失ひつつあるのではないか、の點にかかつてゐる。

用は質を強くし、また美しくする。永い冬の季節の窓に紙を貼ることが、生活の形態となつてゐる中部以北の山村では、いまだに昔のままの、ぶあつい、小形な、織物のやうに強くて美しい障子紙が漉き續けられてゐる。明り窓や障子を契機としての生活の反省や觀照は、もはや都會ではよほど困難になつたが、純粹な障子を持つ東北地方では、それがごく自然に營まれてゐると思ふ。私はこの間、信州北部の紙漉場を旅して、『秋の夜や障子の穴が笛を吹く』だの、『辻番の窓を障子を若葉哉』だの、『うつくしや障子の穴の天の川』だ

の、一茶に障子を取り入れた句の多い所以を、なるほどと感じた。障子は季節を見る窓でもあり、外部の壓力を調整する變壓器でもある。

障子のもつ、あのつつましさかでしかも骨つぽく、暗いやうでしかもきよらかな明るさがあり、らんがしさへではなくてしづかな落ちつきへ人を誘はう、とする祕密は、もと「襖」や「衝立」の意味に用ゐられてゐたのが、平安時代の末乃至鎌倉の初期から現行の意味に變つて行つた歴史の線に沿うて、ことこまかにとぎあかさなければ傳へられまい。が、私の強く感ずる一事は、魚網の一端をたぐればおのづと網全體がとらへられるやうに、われわれの建築様式に永い間伴なつてきた障子といふもの、またそれを必然のこととした日本建築の約束、にふくめられてゐる日本の性格をほぐして行くだけでも、日本人のこころは随分深く窺はれるであらう、といふことである。

和 紙

工藝の美しさの祕密は、主として傳統への忠順から来る。材料や技法や意圖や應用に、大膽な飛躍が要求され、それが新しい美を産み出してゆく場合も勿論ある。またそれがあるがために工藝の時代性や社會性が生ずるのであるが、傳統への忠順を破つた飛躍は、聖書に意味深く描かれた放蕩息子のやうに、いつかはうらぶれた姿をして父の懷へ立ちかへらねばならぬ。立ちかへることもせず誤魔化しだらけの存在を臆面もなく白日にさらしてゐる工藝品の、今の世に何と多いことであるか。年々開かれる官設の展覽會の工藝の部を見るたびに、重い心を抱かずにゐられぬのは、今の工藝家の足が、工藝の傳統をしつかりと踏まへてゐない事實を、あまりにもはつきりと見せつけられるからだ。

傳統を守らずには立つてゆけない工藝の各部門の中